

## 19世紀フランスにおけるベルギー移民と差異の所在

著者	平野 奈津恵
学位授与年月日	2015-07-23
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00072920">http://doi.org/10.15083/00072920</a>

博士論文（要約）

論文題目 19世紀フランスにおけるベルギー移民と差異の所在

氏名 平野奈津恵

## 目次

目次	1
図表一覧	3
略語一覧	6
凡例	7
序章 問題の所在	8
第一節 先行研究の整理と本論文の視座	8
第二節 課題と構成	14
補論 ベルギーとフランスの人口動態、およびベルギー移民の概観	16
第一部 炭鉱都市の生活世界（日常）	27
第一章 炭鉱都市の住民	28
第一節 史料と方法	28
第二節 ランス市の人口	34
第三節 ランス市の労働力人口	45
第四節 ランス市のベルギー人	67
第二章 炭鉱都市の生活	87
第一節 ランス炭鉱会社と住宅・都市建設	87
第二節 炭鉱都市における家族	105
第三節 炭鉱都市における時間	115
第四節 炭鉱都市におけるアソシアシオン	127
第三章 労働者と移民をとりまく法制度	138
第一節 労働にかんする法制度	138
第二節 移動にかんする法制度	152
第三節 国民と外国人を分かつ法制度	158

<b>第二部</b>	<b>ベルギー移民排斥事件（非日常）</b>	<b>170</b>
<b>第四章</b>	<b>現地住民による事件</b>	<b>171</b>
第一節	史料と方法	171
第二節	事件の概略	174
第三節	現地住民たちの行動と態度	180
<b>第五章</b>	<b>帰還者が証言する事件</b>	<b>206</b>
第一節	史料と方法	206
第二節	帰還者とその被害	209
第三節	帰還者たちの証言	218
<b>第六章</b>	<b>外部から見た事件</b>	<b>226</b>
第一節	史料と方法	226
第二節	ベルギーの新聞紙上での反響	230
第三節	フランスの新聞紙上での反響	242
<b>第七章</b>	<b>ベルギー移民のもうひとつの選択をめぐって</b>	<b>259</b>
第一節	史料と方法	259
第二節	フランスへの帰化	263
第三節	炭鉱都市の帰化者たち	267
第四節	炭鉱都市における帰化をめぐって	279
<b>終章</b>	<b>差異の所在</b>	<b>290</b>
<b>補遺 1</b>	<b>統計・資料</b>	<b>297</b>
<b>補遺 2</b>	<b>事件の経緯</b>	<b>314</b>
<b>史料・文献一覧</b>		<b>332</b>

## 図表一覧

- 図0-1 ベルギー総人口の推移（1846-1910年）
- 図0-2 ベルギーの出生率と死亡率の推移（1830-1914年）
- 図0-3 ベルギーの純移動の推移（1847-1947年）
- 図0-4 フランス総人口の推移（1801-1911年）
- 図0-5 フランスの出生率と死亡率の推移（1801-1914年）
- 図0-6 在仏外国人の国籍別推移（1851-1911年）
- 表0-1 ベルギー人とフランス人の産業別就業構成（1901年）
- 図1-1 ベルギー・北フランスの炭鉱地帯（1880年頃）
- 表1-1 ランス市の国勢調査原簿に記載された調査項目（1820-1911年）
- 図1-2 ランス市人口の推移（1801-1911年）
- 表1-2 ランス市の性比の推移（1820-1891年）
- 表1-3 ランス市世代別人口の推移（1820-1886年）
- 図1-3 ランス市の出生率と死亡率の推移（1801-1911年）
- 図1-4 ランス市の婚姻率の推移（1801-1911年）
- 表1-4 ランス市の世帯あたりの子どもの数の割合（1872年）
- 図1-5 ランス市の純移動の推移（1820-1911年）
- 図1-6 ランス市住民の出生地の分布（1880-1891年）
- 表1-5 ランス市の就業率の推移（1820-1891年）
- 表1-6 ランス市男性の産業別就業構成の推移（1820-1891年）
- 表1-7 ランス市女性の産業別就業構成の推移（1820-1891年）
- 表1-8 ランス市の男性農業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-9 ランス市の男性鉱業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-10 ランス市の男性職人・製造業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-11 ランス市の男性運輸・通信業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-12 ランス市の男性商業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-13 ランス市の男性公務・自由業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-14 ランス市の男性その他の就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-15 ランス市の女性農業、鉱業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-16 ランス市の女性職人・製造業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-17 ランス市の女性運輸・通信業、商業就業者の推移（1820-1891年）
- 表1-18 ランス市の女性公務・自由業、その他の就業者の推移（1820-1891年）
- 図1-7 ランス市ベルギー人口の推移（1851-1911年）
- 表1-19 ランス市のベルギー人率の推移（1851-1911年）
- 表1-20 ランス市のベルギー人とフランス人の性比の推移（1851-1886年）
- 表1-21 ランス市のベルギー人とフランス人の世代別人口の割合（1886年）
- 表1-22 ランス市婚姻記録簿にみる配偶者の国籍（1892-1894年）

- 表 1-2 3 ランス市ベルギー人の出生地の地域別分布 (1872 年)
- 図 1-8 ランス市ベルギー男性の出生地の分布 (ベルギー・1872 年)
- 表 1-2 4 ランス市ベルギー人家族の出生地 ① (1872 年)
- 図 1-9 ランス市ベルギー男性の出生地の分布 (フランス・1872 年)
- 表 1-2 5 ランス市ベルギー人家族の出生地 ② (1872 年)
- 図 1-1 0 ランス市ベルギー女性の出生地の分布 (ベルギー・1872 年)
- 図 1-1 1 ランス市ベルギー女性の出生地の分布 (フランス・1872 年)
- 表 1-2 6 ランス市のベルギー人とフランス人の就業率の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-2 7 ランス市の産業別就業人口に占めるベルギー人の割合の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-2 8 ランス市のベルギー男性とフランス男性の産業別就業構成の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-2 9 ランス市のベルギー女性とフランス女性の産業別就業構成の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-3 0 ランス市のベルギー男性農業、鉱業就業者の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-3 1 ランス市のベルギー男性職人・製造業就業者の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-3 2 ランス市のベルギー男性商業等就業者の推移 (1851-1886 年)
- 表 1-3 3 ランス市のベルギー女性就業者の推移 (1851-1886 年)
- 図 2-1 ランス炭鉱会社の鉱区と労働者都市 (1908 年)
- 図 2-2 ランス炭鉱会社の従業員数と住宅戸数の推移 (1855-1911 年)
- 表 2-1 ランス炭鉱会社の労働者都市と住宅戸数 (1911 年)
- 表 2-2 ランス炭鉱会社の労働者・職員住宅 (1855-1911 年)
- 図 2-3 ランス炭鉱会社の労働者都市の空間配置 (第 11 坑サン・ピエール労働者都市)
- 表 2-3 炭鉱住宅入居者の内訳 (1886 年)
- 表 2-4 炭鉱住宅入居世帯数の内訳 (1886 年)
- 図 2-4 炭鉱住宅入居者の人口ピラミッド (1886 年)
- 表 2-5 炭鉱住宅入居世帯主の年齢構成 (1886 年)
- 表 2-6 炭鉱住宅入居世帯の人員構成 (1886 年)
- 表 2-7 炭鉱住宅入居世帯の家族構成 (1886 年)
- 表 2-8 炭鉱住宅の間借り受け入れ世帯と間借り人 (1886 年)
- 表 2-9 炭鉱住宅の間借り人の年齢構成 (1886 年)
- 図 2-5 炭鉱住宅入居者の国籍別人口ピラミッド (1886 年)
- 表 2-1 0 炭鉱住宅街区のベルギー人密度 (1886 年)
- 図 2-6 ランス炭鉱会社の労働者の年齢構成 (1901 年)
- 図 2-7 ランス炭鉱会社の労働者の勤続年数の分布 (1901 年)
- 図 2-8 ランス炭鉱会社の労働者都市 (第 2 坑グラン=コンデ労働者都市)
- 表 2-1 1 パ=ド=カレ県の炭鉱労働者の賃金 (1891-93 年)
- 表 2-1 2 パ=ド=カレ県の炭鉱労働者世帯の年間支出 (1893 年)
- 図 2-9 ノール=パ=ド=カレ県における炭鉱労働者によるスト発生件数の推移 (1848-1914 年)
- 図 2-1 0 パ=ド=カレ県の炭鉱住宅街を練り歩くスト参加者たちの行進 (1906 年)
- 表 3-1 フランスにおける子どもと女性の労働にかんする法規制 (1813-1913 年)
- 表 3-2 フランスにおける成人の労働時間にかんする法規制 (1848-1919 年)
- 表 3-3 ランス炭鉱会社の共済組合 (1860-1914 年)

- 表 3-4 1889 年国籍法の改正点
- 表 3-5 フランス徴兵制の変遷 (1793-1913 年)
- 図 4-1 騒動の伝播 (1892 年 8 月-9 月)
- 表 4-1 組合集会と要求事項 (1892 年 8 月-9 月)
- 表 4-2 逮捕・起訴の罪状
- 表 4-3 逮捕・起訴者の年齢構成
- 表 4-4 逮捕・起訴者の出生地
- 図 4-2 「ベルギー移民排斥事件」と「カルモー炭鉱のストライキ」
- 表 5-1 「帰還者調査」で得られた回答
- 表 5-2 駐北仏ベルギー領事と管轄地域内の在留ベルギー人
- 表 5-3 帰還者の内訳
- 図 5-1 帰還地の分布
- 表 5-4 帰還の直接原因
- 表 5-5 帰還者が申告する被害総額
- 図 5-2 「ベルギー人炭鉱夫たちの大移動」 (1892 年)
- 図 6-1 19 世紀ベルギーの社会構造
- 図 6-2 フランス臨時国会の招集 (1892 年)
- 図 7-1 パド=カレ県およびランス・リエヴァン市におけるベルギー人による帰化件数の推移 (1888-1910 年)
- 図 7-2 フランスにおける帰化件数の推移 (1847-1914 年)
- 図 7-3 フランスにおける男性帰化者の出身別推移 (1889-1913 年)
- 表 7-1 パド=カレ県における帰化者の出身国 (1887-1914 年)
- 図 7-4 パド=カレ県における帰化申請件数の推移 (1887-1914 年)
- 表 7-2 ランス・リエヴァン市の帰化者の年齢構成 (1892-1893 年)
- 表 7-3 ランス・リエヴァン市の帰化者の出生地 (1892-1893 年)
- 表 7-4 ランス・リエヴァン市の男性帰化者の移住時期 (1892-1893 年)
- 表 7-5 ランス・リエヴァン市の男性帰化者の移住時の年齢 (1892-1893 年)
- 表 7-6 ランス・リエヴァン市の帰化者の婚姻状態 (1892-1893 年)
- 表 7-7 ランス・リエヴァン市の帰化世帯あたりの未成年の子どもの数 (1892-1893 年)
- 表 7-8 ランス・リエヴァン市の男性帰化者の職業 (1892-1893 年)
- 表 7-9 ランス・リエヴァン市の男性帰化者の給料 (1892-1893 年)
- 表 7-10 ランス・リエヴァン市で支払われた帰化手数料 (1892-1893 年)
- 図 7-5 「帰化」 (1894 年)
- 表 7-11 パド=カレ県の主要炭鉱会社における外国人労働者数 (1893 年)

## 略語一覽

ADN	Archives Départementales du Nord.
ADPdC	Archives Départementales du Pas-de-Calais.
AMAE	Archives du Ministère des Affaires Étrangères de Belgique.
AML	Archives Municipales de Lens.
AN	Archives Nationales de France.
BML	Bibliothèque Municipale de Lille.
CAD	Centre des Archives Diplomatiques de France.
CAMT	Centre des Archives du Monde du Travail.
CGT	Confédération Général du Travail.
CHM	Archives du Centre Historique Minier du Nord-Pas-de-Calais.
INSEE	Institut National de la Statistique et des Études Économiques.
<i>JORF</i>	<i>Journal Officiel de la République française.</i>
POB	Parti ouvrier belge.
POF	Parti ouvrier français.
<i>RBHC</i>	<i>Revue Belge d'Histoire Contemporaine.</i>
<i>RN</i>	<i>Revue du Nord.</i>
SMPdC	Syndicat des mineurs du Pas-de-Calais. (Chambre syndicale des ouvriers mineurs du Pas-de-Calais)



## 凡例

本論文においては、以下の書式にしたがって記述する。

- 1、人名・地名の固有名詞はカタカナ書きとし、初出の時のみ原語の綴りを（ ）内に挿入する。
- 2、ベルギーの地名は原則フランス語での呼称を採用し<sup>1</sup>、必要な場合にはオランダ語呼称も併せて書き記す。これは依拠した史料の表記を尊重するためである<sup>2</sup>。
- 3、引用は「 」内に挿入するか、字下げして斜体で表記する。
- 4、引用文中の [ ] は筆者による補足である。
- 5、国名あるいは言語の略記は、仏（フランス/フランス語）、白（ベルギー）、蘭（オランダ/オランダ語）とする。

---

<sup>1</sup>例外として「ベルギー」と「アントワープ」については、それぞれオランダ語(België)と英語 (Antwerp) の読み方が日本語では定着しているため、これを採用する。

<sup>2</sup>ベルギーでは 1830 年の独立以来フランス語が唯一の公用語とされ、オランダ語(フラマン語)が公用語化されるのは 1898 年のことである。ただ、第一次大戦以前の公文書に目を通す限り、フランス語がもっぱら使用され、まれにオランダ語で書かれた文書があっても、必ずフランス語の翻訳が付されていた。

以下の本論文の内容は、5年以内に出版の予定。